



—湾岸・アラビア半島地域ニュース—

イエメン：サーレハ大統領のスピーチ（10月8日）

1. 10月8日、サーレハ大統領は、ハーディー副大統領同席の下、多数の国会議員、諮問評議会議員（計約115名）から負傷回復・帰国のお祝い等を受けた際に、スピーチを行った。概要は以下の通り（サバ通信等）
  - (1) 自分は政権を欲していない。自分は政権から離れる。数日中に政権から離れる。自分は政権から退く。
  - (2) 政権を掌握する（ことを望む）者がいる。軍人であれ、文民であれ、国土を握ることを狙う者がいる。しかしながら、彼らが国土を破壊することは不可能である。破壊活動を行う者に政権は渡さない。
  - (3) 数日中に再会しよう。イエメン国民に対して隠し事なく透明性ある形で情勢を説明したい。国会議員と諮問評議会議員を、こうした会合に招待する。
  - (4) イエメン帰国前の時点で、ある大国から書簡が届き、その中で、「第一にあなた自身のために、第二にイエメンのために、第三に我々の利益のために、帰国しないように助言する」とあった。では、自分はどこに行けばよいのか。自分は一国の大統領であって、靴一つ下げたトランジットの旅行客でもないし、アラブの同胞国あるいは友好国から給与を受け取っているエージェントでもない。
  - (5) (6月3日の大統領宮殿モスク爆破事件後) 自分は15日（115日との表記もあり）間、死んでいた（も同然であった）。(62年の9月26日) 革命で死んだものと考えているので、死を恐れることはない。
2. サールハ大統領のスピーチに対する反政府側の反応
  - (1) (野党系) 国民対話準備委員会サブリ報道官コメント  
世論を惑わすための国外向け情報作戦にすぎない。サーレハ大統領が真剣ならば、昨晚のうちに行動し（国外に）出ないのはなぜか。このスピーチは、ベンオマル国連事務総長特使が11日に国連安保理に提出する報告書に対する先制パンチである。
  - (2) ノーベル平和賞を受賞したカルマーン女史のコメント  
我々はあの男（サーレハ大統領）を信じていない。辞任するなら結構であるが、それは彼の問題である。政権を渡すべきである。我々は平和的革命を継続する。